

文芸大賞

ぼくらの夏休み

岡山県 坂口 はじめ

これは洞穴ほらあなが大好きだった頃のぼくの話だ。その頃のぼくは、洞穴があると、いつも中に入ってみたいとなった。何かおもしろいものがきつとそこにかくされているにちがいないと、わくわくした。

夏休みには、毎年おかあさんの車でおじいさんの家に行つた。でもぼくはもう五年生だ。おじいさんの家ならひとりでも行ける。

ぼくは思いきつてひとりでおじいさんの家に行つてみた。おじいさんの家までは自転車で三十分ほどだ。町をぬけるとすぐ、あたりにはたんぼが広がっている。

おじいさんの家の向かいには、昔、洋服の仕立て屋をしていたあべさんという老人がひとり住んでいた。仕立て屋はとつくにやめたけど、今も、「テーラーあべ」というちよつとレトロな感じの看板かんばんが家の壁かべのはしにかかっている。そのあべ

さんは、少し前に階段かいたんから落ちて脚の骨を折り、むすこの遠くの町の病院に入院してしまつた。治なおつてもそのままむすこの家で暮らしているそうだ。

あべさんの家の裏手うらてには昔の石垣が残っていた。その石垣に洞穴があつた。

おじいさんの家にはおばあさんと、おかあさんの兄でぼくのおじさん夫婦と、いとこのけんたが住んでいる。けんたはぼくと同い年だ。あべさんちの裏の洞穴を探検に行こうとさそうと、「いいよ」と気安く答えたけど、そのあとで変な話をしてきた。

「あの洞穴にはきつねが住んでいてさ」

「え、きつねだつて」

「うん、野生のきつねが住んで、人をばかすんだよ」

「はあ」

ぼくはあきれた。けんたが今時こんなことを言うなんて。本気で言っているのか。けんたは野球選手になるんだと意気込んでいて、大谷選手のフォームを真似て、しよちゅう鏡に自分の姿を写しているような奴だ。だけど、かつこうだけで、球はそんなに速くない。

「昔ね、あべさんちのおばあさんが夜になると家を出ていくので、変だと思っておじいさんが跡あとをつけたら、あの洞穴に入っていたんだよ。それで、おじいさんが穴に向かつてよびかけると、『コン、コン』と答える声がある。その声がおばあさんの声なんだよ」

「そりゃあ、おばあさんが答えたんだろ」

「だからへんだろ、『コンコン』ていうんだよ。きつねつきってやつだったんだよ」

「へえ」

「おばあさんは朝になったら帰ってきて、昨夜のことを何にもおぼえてないんだって」

けんたはささやくような声で説明した。

「昔っていつのことだい」

「そりゃあ、四十年か、五十年くらいか、もつと前かも」

「へーえ、じゃあ、あべさんも、おじいさんおばあさんじゃなかったよね。せいぜい、おじいさんおばあさんだね」

ぼくはそんな話、ちっともこわくはなかったし、だいたい

きつねつきというワードも何だかおかしいなと思った。きつねつきだつていうおばあさんが一年ほど前に亡くなったとき、あべさんは九十歳を過ぎていたけど、背筋もピンと伸びてすぐく元気だった。きつねつきの話など全くしてなかった。

「石垣に洞穴があるでしょ、あの中、どうなってるの」
とぼくはおじいさんに聞いた。おじいさんは、「うーん」とうなった。

「ずっと前には町内会で食糧しよくりようの貯蔵庫ちよぞうこか何かにしてたんじゃないかなあ」

「あべさんちのものなの」

「あそこの石垣は個人のものじゃないわ、ずっと昔の石垣で、穴は戦時中に掘ったって聞いたわよ……」
とおばあさんが口をはさんだ。

戦時中ってなんだ、と思ったけど、それはもう何十年も昔のことらしい。

おじいさんは人差し指を立てた。

「おまえら、まさかあの洞穴に入るつもりじゃないだろうな。やめとけよ。長いこと放っておかれた穴は空気がうすくてよどんでいるし、何がいるかわからんぞ。あの穴はちゃんと入り口をふさいどかやあならんな」

次の朝、おじいさんが出かけるのを見とどけると、ぼくはけんたに目配せした。

「行くぞ」

「よし」

軍手とハサミをリュックに入れて、ぼくらは洞穴に向かった。ハサミは雑草を刈るためだ。もちろん懐中電灯も忘れなかった。

石垣は雑草だらけで、穴の入り口を探索するのは大変だった。一応、柵はしてあったけど、もうぼろぼろで、簡単に外れた。ずるずると葛を引つ張った。葛には鳥の羽や枯れ葉が引つ掛かっている。葛をどかすと入り口がスッポリと見えた。ぼくらは中に入ることにした。けんたが懐中電灯を取り出して穴の中をゆっくり照らした。奥は十メートルくらいか。

穴の中はひんやりとしていた。かびくさいというより、おばあさんが毎日仏壇で焚いている線香のようなにおいがした。穴の天井はぼくたちが立つて歩けるくらいの高さはある。懐中電灯で照らしてみると、壁にくぎでひっかいたような跡があった。「玉」と書いてあるようだ。他にも何か書いてあるが、けんたにもぼくにも見当もつかない。

地面は少し湿っているけど、中は草も生えていないし、でこぼこもなく歩きやすい。ぼくたちはほとんど奥に入ってしまった。もちろん、きつねつきって話は信じていなかったけど、何かありそうじゃないか。きつねではないにしても、なにかおもしろいものがあるんじゃないのかな。ちよつとどきどき

した。

「のぼるー、もう帰ろうぜ。なあんにもないじゃないかよう」
けんたが声をあげた。

「まだなにも見つけてないのに帰れるか。いやならお前だけ帰れよ」

ぼくは、ほんとはけんたと同じ気持ちだったんだけど、強がってみせたのだ。だいたいこんな奥が深いとは思っていなかった。もう外の光は入ってこない。ちよつと不安になった。

おじいさんに聞いたけど、壁に仏像を彫ってそこをぐるぐる回る修行があるらしい。富士山の噴火でできた穴だとか、他の場所ではわざわざ穴を掘ったりもしたという。でもそんなものとも違うようだ。この洞穴は外から見ている以上に奥が深い。

「おい、のぼる、懐中電灯でもと奥の方をてらしてみろよ」

ぼくは奥の方に向かって懐中電灯の光をのぼしたが、なんだか光が一気に暗くなった。電池が切れかけた。けんたもぼくの後ろから懐中電灯を右や左に動かした。

「のぼるー」

けんたが急に泣きそうな声を出した。

「なんだよ」

なさけないやつ、とぼくは思った。

「懐中電灯がさあ」

ぼくはけんたを振り向いた。懐中電灯の光がちらちらしている。

「どうしたんだ。お前の懐中電灯も消えかかっているな」

ぼくらはふたりとも懐中電灯の電池の残りの量を確かめずに来てしまった。まさかこんなところで二つとも消えてしまったら困る。

「おい、どうする」

どうするつたつて。ここで懐中電灯が消えたら真っ暗になっちまうぞ。

「しかたない、もう帰るか」

成果はなかったが、また出直せばいい。そう思ったとたん、急にけんたの懐中電灯が、バツと明るくなった。光は赤く輝いているみたいだった。

「うわ」

「なに、これ」

ぼくらの叫び声が穴の天井にこぼれました。その時、奥のほうに小さな光が見えた。

「きつねだ」

「えっ、きつね」

「きつねの目が光った」

けんたの声がふるえている。ぼくは目をこらして奥の方を見たが、はつきりとはわからない。光はだんだん大きくなっ

てくる。何かが向こうから近づいてきている。「帰らなきや」と思ったが、足がすくんだ。動けない。軍手の中でびっしょりと汗をかいた手がコチンコチンに固まっていた。このままじゃふたりともきつねに化かされる。きつねつきになってしまわず。胸がどきどきした。目をいっぱいに見開いて向こうを見ると、近づいてくる光は懐中電灯だ。人間だ。

「オーイ。きみたち」

向こうの明かりがぐるぐる回って声がした。男の子の声だ。男の子に化けたきつねか。

「オーイ」

立ちすくんでいるぼくたちに、呼びかけているようだ。

けんたがぼくのシャツの袖をひっぱった。けんたは相手が出てきたように懐中電灯をぐるぐる回して同じように声を上げた。

「オーイ」

けんたの声がわんわんひびいた。そうだ、いくらきつねが化かそうとしても、おうむがえししていれば何ごとも起らないと聞いたことがある。同じ学年でもけんたはぼくより半年早く生まれているから半年分はりこうなのだ、と思った。顔が分かるほど近づいてきたのは少年だった。ぼくたちと同じくらいの年に見える。白いシャツに膝までの半ズボン姿だ。白い布をかぶせた学生帽は昔の写真で見た子どもみ

「たいだ。そして下駄げたをはいていた。少年は笑いながら言った。
「きみら、だれ。何してるの。ぼくは橋本あさひ。あさひ
が上るの、あさひ」

「ふうん、ぼくは河原けんたで、こっちはいとこのぼるだよ」
けんたが堂々と名のつた。さつきまでぼくよりずっとびびっ
ていたのに、相手が同じくらいの子ともだと分かるととたん
に度胸どきょうがすわつたらしい。

「ぼくらはこの洞穴の探検にきたんだ」

けんたはさつきとぼくらの目的をあかしてしまった。だめ
だよ。相手の言うことや、やることをおうむがえしにする
んじゃないのか。だが、このあさひっていう子はどう見て
もきつねじゃない。着ているものはダサイが、ふつうの子ど
もだ。

「ぼくも探検にきたんだ」

とあさひが言った。

「えーと、それで、君は何か見つけたかい」

けんたが聞いた。あさひがいいものを見つけていたら、ちよっ
と悔しい。

「こんな箱を拾った」

「なに、なに、見せてよ」

「あけようと思ったら、きみらの声が聞こえたから、ぼくも
まだ見てないんだ」

「なにがはいっているんだろう。あけて見ようぜ」

けんたが懐中電灯を箱の十センチくらいのところまで近づ
けた。その箱はうちのおばあさんが大事にしまっている箱に
似ていた。おばあさんは、その箱に、若いときおじいさんか
らもらった手紙を入れているのをぼくは知っていた。

「パツと煙が出て、ぼくたち白髪しろがのおじいさんになっちゃうって
いうことはないか」

けんたが茶化した。

「まさかあ」

あさひとぼくが声をそろえて笑った。笑い声が洞穴にわん
わんとこだました。

「あけるぞ」

あさひがぼくのほうに向いて言った。うん、とぼくはうな
ずいた。

三人で箱をのぞき込んだ。箱には写真が三枚入っていた。
白黒の集合写真しゅうごうしゃしんだった。十人ほどの大人や子どもが写って
いた。

「なあんだ、写真か。ここに写っているの、だれだかわかるか」
けんたはもう友だちになったみたいに気安くあさひに聞いて
いる。

「うーん、この写真どこかで見たことあるような気がするな」
あさひが懐中電灯に照らされた写真をじいっと見ながら

言った。ぼくの見たところ、ものすごく昔の写真だ。女の子はおかつぱ頭に白シャツ、もつさりしたズボンをはいているし、年配の女性は着物に割烹着姿だ。

あとの一枚は、集合写真の中のひとりとと思われる少年がまっすぐに立っている写真だった。ふとあさひと同じような服装だな、と考えた。白シャツに半ズボンで、白い布をかぶせた学生帽。それに、下駄ばきだ。

もう一枚は眉の濃い女の子で、その子は写真の少年より幼い。けんたはあごに手を当てて、考え込むようなしぐさをした。

「この写真の子、あべさんのおじいさんに似ているような気がするよ」

「え、そうかあ」

ぼくはあべさんの顔をじっくり見たことがないし、九十歳のおじいさんの顔をさかのぼってもこんな顔の少年だったかどうかわかりやしない。

「この写真は子どもの頃のあべさんだつていうのか」

ぼくは疑うようにけんたを見たが、けんたはぼくを無視して、あさひの方に向かって言った。

「な、あべさんに似てるよね。この洞穴の前の家、テーラーあべのおじいさん」

あさひはだまって首をかしげた。よくわからなかったみた

いだ。けんたがかつこつけてテーラーなんて横文字を言うからわからなかったのかもしれない。だいたいあさひがこの近くの子かどうかもわからない。あべさんなんて、もともと知らないのかもしれない。

「じゃ、この女の子は」

とぼくはけんたに聞いたが、それにはけんたも答えられない。あさひは写真を箱にもどして大事そうにふたをしめた。

「もとあつた場所に置いといたほうがいいんじゃないか」とけんたが言った。

「そうだね。だれかが置いたのなら、取りにくるつもりかもしれないし。いや、もう置いたことも忘れちゃってるんじゃないかな」

とぼくは言った。

「うん」

あさひはうなずいたが、そのまま箱をにぎりしめていた。あさひはだれかに見せようとでも思っているのかな。ま、あさひがどうするかは、あさひの自由だ。この写真の入った箱を見つけたのはあさひだ。

それより、ぼくはずっと気になっていたことをあさひにたずねた。

「ねえ、きみはどこからこの穴に入ってきたの」

あさひはぼくらが入ってきた方とは反対を指差した。

「交差点のところに倉庫があるだろ、そこに入り口があるんだ。そこから入ったんだ」

「ふうん、交差点のそばの倉庫か、あんなところにも入り口があつたんかあ」

けんたが首をひねった。ぼくたちは奥行きがせいぜい十メートルだと思つていたのに、その倍はありそうだ。この洞穴はどこまで長いのか。わけがわからない。

「じゃあな、もうぼくは帰るよ」

あさひは箱をわきにはさんで、懐中電灯を振つて言った。

「あしたも来るかい。来るならここでまた会おう」

「うん、キャッチボールしよう。ぼくグローブ持つてるから」けんたが言った。

あさひは一瞬戸惑つたような顔をしたが、すぐニッコリして、クルツと向きを変えると振り向かず歩いて行つた。その姿が見えなくなると、けんたが低い声で言った。

「なー、のぼる、どう思う。あいつ、きつねではないけど、下駄はいてたのに、音もしなかつたな」

ハツとした。そのことには気が回らなかつたけど、そういえば、そうだ。なんだかぼくは首筋がぞおつとしてきた。

ぼくたちふたりはそうそうに穴を出ることにした。帰り道は入つてきたときほど長くは感じなかつたが、懐中電灯の電池がなくなりそうになつてきて、気が気でなかつた。

夕飯の時、ぼくはおじいさんとおばあさんに聞いてみた。

「ねえ、向こうの交差点の辺に橋本あさひつて子、いるかなあ」

けんたはチラッとこちらを見て、眉を寄せた。ぼくらが洞穴に入ったことはおじいさんたちには内緒だ。

おじいさんもおばあさんも知らない、と言つた。となりの町内の十軒のうち八軒が橋本という姓だ、だれかしんせきの子が夏休みで来ているんじゃないの、と言う。

最近じゃ、近所といつてもさほど付き合いがないし、しんせきの子が来ていても、わからないままだ。ぼくは、橋本あさひは何者だつたのだろうと、何となく不安を覚えた。

次の朝、けんたがグローブを二つバットに引掛けてぼくの部屋に入つてきた。大谷翔平の背番号17の付いた帽子をかぶつてゐる。

「さつさと起きろ、やつぱり行こうぜ。また会おうつて約束したんだ、こつちはふたりだし、バットも持つてる。なにもこわがることない」

「そ、そうだな」

洞穴を見に行こうと初めに誘つたのはぼくだ。けんたが行くというのに、ぼくがいやだと言うわけにはいかない。

けんたがきつねつきの話をしたから、ちよつと気味悪く思えたけど、あさひは、ふつうの子だった。

きのうは恐る恐る洞穴に入ったが、きようは威勢がいい。ぼくたちより早くあさひは来ていた。あさひはきのうとは違う丸首シャツを着ていた。なんだ、ちゃんと靴もはいている。今まで見たことないスニーカーだけど。ぼくらを見つけて、大きく手を振った。ぼくたちも振った。

「やあ、来たんだ」

「当たり前だ。約束だもんな」

けんたが外でキャッチボールしようと誘った。

「うん」

はずんだ声をあげて、あさひは肩をぐるぐる回した。あべさんちの裏、洞穴のそばには公園がある。最近ではキャッチボール禁止の公園もあるが、この公園はキャッチボールはできる。せまくて、ふだんあまり利用者がいないからだろう。たまには幼稚園児が遊んでいる時もあるが、その日はだれもいなかった。これならキャッチボールしようだ。

あさひはぼくらについてきて、洞穴の外に出ると、まぶしそうに目をパチパチさせた。ぼくだってまぶしい。

「よおし、いくぞ」

けんたがはりきってボールを投げた。さすがに大谷選手の投球を真似しているだけある。バシッと球を受け止めたあさひは、ボールを何回もグローブにたたきつけながら言った。

「いいボールだな」

あさひの球はけんたの比ではなかった。大谷翔平さんが小学生の頃にはこれくらい投げてたんじゃないだろうかというくらいの速球だ。グローブにスポッと収まった時、反動でけんたは後ろに転がりそうになった。

「おまえ、すげえ球投げるなあ」

けんたはあきれ顔だ。投げた時にはストレートかと思ったけど、グローブに収まる時にはシュツと下がる。変化球もお手の物だ。

今度はぼくが相手だ。あさひの球が飛んで来た時、顔面に一直線に、めり込むかと思った。あさひの球を受けたグローブの中の手がジーンとしびれた。

「ヤバイ。あさひ、ハンパねえ」

とぼくは大声を上げた。けんたは笑ったけど、あさひはケロツとしていた。ぼくがこれでもかと力一杯投げると、あさひは軽くつかんで声をあげた。

「よしっ」

「よしってなんだよ、ストライクだろ」

ぼくはあさひのことばにちよつと上から目線じゃないかと引かかったけど、しかたない。あさひの腕前はすごかった。ぼくらはしばらく交替しながら投げ合った。ぼくはもちろん、けんたもとてもあさひにはかなわない。

「はあ、疲れちゃったよ」

汗でグシヨグシヨになった顔を見合わせて笑った。

「おい、けんた、大リーグの選手になるって奴がこれぐらいで、もうこうさんか」

ぼくはけんたをからかった。本当のことを言うと、けんたがもつとやろうと言ってもぼくはへとへとで、とても続けられそうにもなかったのだけど。

あさひはニコニコしながらけんたにグローブを返してきた。

「じゃあ、ぼく、帰るよ」

「おい、また穴から向こうへぬけるのか」

「うん、その方が近道だから」

「ねえ、あさひ、これ持つてかないか、このグローブ」

あさひがびつくりして振り返った。

「ほんとにもらつていいの」

「いいよ、ぼくももうひとつ持つてるから」

「ありがとう」

あさひはグローブをギュツと胸に抱いた。あさひの後ろ姿を見ながら、ぼくは言った。

「ずいぶんと気前がいいな、けんた」

「もうひとつ持つてるって言ったろ」

「うん」

「なー、のぼる、気がついたか。あさひ、足音たてた」

そうだ、きのうは下駄の音がしなかったのに、きょうはポー

ルを投げる時も取る時も、ズツクの音がしていた。今も足音をさせて走つていった。

その日は、おばさんがごちそうを用意してくれて、みんなで夕食を食べた。秘密のはずだったけど、けんたが洞穴探検のことをさつさと白状した。あさひのことを話したかったからだ。あんなすごい球を投げる小学生がいるって、どうしても言わずにはいられない。

「橋本あさひつてすごいんだ」

けんたが勢い込んで言った。

「うん、かなりやばい。豪速球、百三十キロ、いや百五十キロ」

ぼくもつけ加えた。

「いくらなんでもそりゃあなからう」

おじさんがあんぐり口を開けた。

「あの洞穴で会ったんだ。けんたがさ、あべさんちのおばあさんがきつねつきになって、夜、あの洞穴に入つていったつて言うから初めビクビクしたけどさー」

おばあさんがけらけら笑った。

「きつねつきつてことば、あんたたちが知ってるなんて、驚き。迷信よ。あべさんのおばあさん、きつねつきじゃなかったわよ」

「あの穴は防空壕ぼうくうこうではないかしら」

とおばさんが言った。

おじいさんが重々しく言った。

「戦争の時にな、B29というアメリカの戦闘機が攻撃してくるといので、あべさんのお父さんたちが防空壕を掘ったんだって聞いたことがある。戦争がおわつても、そのままになっていたんだが、お前らのような悪ガキが入っていたはずらして、何かあつてはいけないからな、前からふさがなくちゃとあべさんと話してたんだ……」

あの洞穴は、あべさんのお父さんが掘ったのか。

おばあさんが説明する。

「戦争前には、あべさん一家は、おじいさんおばあさん、お父さんお母さん、おじいさんおばあさんまで一緒に住んでいて、あべさんや、あべさんの妹、弟もいて、一時は総勢十人くらいで賑やかに暮らしてたんだって。橋本家に嫁入りしたおばあさんは、おむこさんが戦死して、子連れで帰ってきてたって。その時のあべさん、小学生だわね」

おばあさんもうなずいた。

「戦争中におじいさんは兵隊に行き、おばあさんも家を出て、おじいさんおばあさんも亡くなられた。子どもたちが疫痢で死んで、残った子どもはあべさんひとりだったって」

「当時は衛生事情が悪くて、疫痢ってこわい病気だったのね」

おばあさんも眉をひそめながら言った。

写真はやはりあべさん一家だったのかなあ。だとしたら、あの写真の少年はやはりあべさんだったのだろうか。眉の濃

い女の子はあべさんの妹だろうか。

ぼくのおじいさんとおばあさんも、六十歳をこえているけど、それでも戦争のずーとあとで生まれたのだ。そんな昔のことなど知らなくて当然だ。

ぼくはけんたに目配せした。あしたまた洞穴へ行ってみよう。あさひに会つてもう一度あの写真を確認しよう。

けんたとぼくは次の日も、洞穴に行った。おじいさんはきょうも仕事だ。おばあさんが「なんかおもしろそう」って言うてついできた。不気味な雰囲気は全くなかった。

ぼくらは懐中電灯を点していそいで中に入って行った。

「あさひ、来るかなあ」

とけんたが言う。

「あさひつて橋本の本家の子かしらね。小学生の孫がいるって聞いたことないけど」

おばあさんはひとりごとを言っている。

「あ、ほら、これ」

懐中電灯の光を右に左に動かしながら前を行っていたけんたが、立ち止まった。

「ね、ここに何か彫つてあるよ、おばあさん、見て。『たま』っていう字だよ」

ぼくもそばに寄つて、懐中電灯の光を右の壁に当てた。

「ああ、これ、玉砕つて書いてあるわ。ほら、玉の下に砕と

いう字も薄く見えるわよ、うわあ、こんなものが残っているなんてね。やっぱり防空壕だわ」

おばあさんが溜め息をついた。

「え、玉碎つてなんだ」

「一億総玉碎つて、あなたたち、知らないよね」

「なんのこと」

「戦争で日本が負けそうになったとき、国民すべて玉碎の覚悟で戦おうという目標をかかげたんだよ。玉碎つてのは玉のように美しく散る、ということかな。この防空壕に逃げ込んだれかが彫つたんだろうね」

「へえ、日本人みんな死ぬ覚悟つてこと」

「ま、そうね」

「え、じゃあ、日本がなくなっちゃうじゃないか。何のために戦うの。ばかみたいだ」

けんたが言うと、おばあさんはけらけら笑った。

「そうだよねえ」

ぼくたちはきのうの道をそのまま進んで行こうとしたけど、穴はすぐ、行き止まりになった。あれ、向こうへぬけているはずだと探しても見つからない。あさひはどこから入って来たんだろう。

「ここでおわりね」

とおばあさんは周囲を見回しながら言った。

「何もないけど、やっぱりふさいだほうがよさそうね」

ぼくもけんたも、それこそきつねにつままれたような気になった。ぼくらの探検に付き合ったおばあさんは、「じゃあ帰るわ」とさっさと帰ってしまった。

あさひはその日は来なかった。ぼくたちは洞穴を出て、あさひが言っていた交差点の方に回ってみた。入り口があるはずだ。だけど、いつそう謎は深まった。古い倉庫はまだあるけど、その裏手に洞穴の入り口なんかなかった。探しても探しても見つからなかった。

冬休みにおじいさんちに行ってみると、防空壕のあったところはコンクリートで固められていた。子どもが中に入って危険だ、とふさがれたのだ。けんたは、防空壕にはもう興味もなさそうだ。

ぼくは、橋本あさひはいつたいたれで、あの写真はどうなったのか、知りたかった。あべさんちのしんせきの子かもしれない。隣の橋本さんの家を一軒一軒たずねて回りたいくらいだった。でも知らない家をたずねるわけにもいかない。

写真もあの時見ただけで、あさひが箱ごと持つて行った。もつと探せば、あさひがどこに住んでいるのか、あの写真の少年や眉の濃い女の子はだれなのか、わかったのだろうか。もしかしてあさひはあの防空壕に思いを残した子のたましい

だったのだろうか、女の子は疫癘で亡くなったあべさんの妹だったのだろうか、などと考えたりもした。

あさひにはあれから一度も会っていない。ネットで「橋本あさひ」って検索したけど、何もでてこなかった。

「おい、のぼる、キャッチボールしようぜ」

けんたがグローブをぼくに放り投げて走っていく。

「オーケー」

ぼくは大声で答えてけんたのあとを追った。

優秀賞

ナオキと図書山先生

可児市 奥村 房世

四月一日、山田ナオキは藍田^{あいだ}市立藍田小学校の会議室に、いつものジャージではなくスーツを着て座っていた。これから、新年度最初の職員会が始まる。ナオキは大学を出てすぐ教員になり、今日から二年目のスタートだ。^{きあい}気合が入る。

職員会の初めに、正規教員ではない職員^{あいさつ}の挨拶があった。スクールサポーターと呼ばれている学習支援員^{しえん}の人たち、それからポルトガル語とタガログ語の通訳の人。名前を呼ばれて、会議室に順番に入ってくる。十人ぐらい並んだ時だった。

「山田なおき先生」

えっ俺^{おれ}? と驚^{おどろ}くと、こう続いた。

「ナオキ先生と同名同名ですが、学校司書の山田先生は漢字で『直線の直に木』と書きます。どうぞ」

「はい!」と、低く大きな返事と共に入って来た人は、会

議室の入り口に、頭がぶつかりそうで、その寸前にひよいと頭を下げ、下げたまま入って来た。デカイ。直線より曲線だ。ナオキの字は、読みやすく試験の時も書きやすいようにカタカナにしたと親から聞いているが、体形が直線なのは自分の方だろう。

ナオキは思わず「ヘビー級」と口に出した。会議室にも軽いどよめきが走る。たぶん身長は百八十センチ以上、体重は百キロ以上はあり、隣^{となり}に並んだ人の二人分、いや細身の人となら三人分の大きさだ。相撲^{すもう}取りのようだ。

その山田直木先生が顔を上げた時、会議室に座っていたほぼ全員の、驚きの目が集中した。しかし本人は特に気にする様子もなく、平然としている。

同じ名前か……ナオキは身長百七十センチと言っているが、本当はちょっと足りない。これから『小さい山田ナオキ』

と呼ばれるかと思うと、なんだかいやな気がした。

全員で二十人を越す非正規職員は、挨拶を済ませたら、そのまま会議室を出る。会議室に残ったナオキたち正規職員は、これから職員会が延々と続いていく。三時間はかかるな。

今年ナオキは、五年生の担任になり、教室は三階になった。子どもたちはまだ学校へ来ないが、新学期の準備が山ほどあり、毎日出勤していた。

職員室の隣が保健室で、その隣が図書室である。去年、初めてこの学校へ来て校舎を回った時、図書室前のガラスケースをのぞいてみた。何段もある棚いっぱい、王冠のレリーフが付いた楯や賞状が入っていた。しかしその賞状の年号はどれも「昭和」だった。遠目には光っている王冠も、よく見るとシミがびつしり浮かんでいた。昭和で時が止まっている。

時が止まっている感じがするものは、まだあった。お湯は出ない。冬でも冷たい水で手を洗う。トイレはほとんど和式。体育館にはエアコンがない。教室のエアコンも三年前に付いたらしい。掃除はほうきと水ぶき雑巾。網戸がないから、窓を開けるとハチやハエが入ってくる。今どきこんな家はないだろう。

一年たつて、ちょうど今日、次は「令和」になると発表

があった。昭和どころか、平成がもうすぐ終わるのだ。

一年前を思い出しながら、図書室の前を通っていくと、中から声が聞こえてくる。

「先生、助かった。すごいなあ、その力。やっぱり体が違うんやね。おれら二人でやっと持てる教科書の箱を、軽々と持ち上げさつと運ぶ。長年やつとるけど、教科書搬入が、こんなに早く終わったなんて初めてや。ほんと、先生ありがとうね」

「ううん、先生やないって。教員免許持つとらへんで。山田と呼んで下さい。菊野書店さん、今年から初めてなので、よろしくお願いします」

「こちらこそね。ところで、何やってた?」

「学生の頃、ウエイトリフティングをちよつと。相撲は、声をかけられたことがあるぐらい」

「違う違う、仕事だよ」

「実は……ずっと書店に勤めてました。店長もやらせてもらったけど、このご時世、赤字が続いてね。立て直せなくて、とうとう閉店です。お恥ずかしい。菊野書店さんがうらやましい」

「ごめんな、変なこと聞いて。そうか。そういう事情があったんやなあ。学校司書は、たいしてもらえんやろう。もし、もういつペン働きたいなら、うちも考えとくよ」

「ありがとうございます。ここは一年契約で三年で終了、給料も安いけど、実家暮らしになったし。売り上げのことを考えて、夜寝れないのは、もうしばらくいやかな。久しぶりの給食も楽しみで」
「そっか。その黒いエプロン姿、よう似合うよ。じゃそろそろ。がんばれ新米さん」

ガラガラと音がして、作業服を着た年配の二人の人が出てきた。盗み聞きしていたわけではないが、ナオキはちよつとどぎまぎし

「ご、ご苦労様です」と挨拶して足早に去った。会話の音が大きいので、廊下に居ても聞こえてしまう。

非正規の人を「時間で働く先生」と以前の主任は言っていた。ナオキは、教員採用試験を一度で受かったので「優秀なのです」と去年はよく言われた。うれしいが、先生の中では一番年下ということになる。でも、学校で働くのが初めてのもう一人の「なおき」は、自分より新米なんだ。

四月七日になり、いよいよ新学期がスタートした。始業式が午前中で入学式が午後。転入職員は、その前の着任式で、体育館に集まった五百人近い子どもたちに挨拶する。

直木先生がステージへ上がった時、それまで静かだった子

どもたちがざわついた。「大きい」「でか」と言う声も混じる。

「今年から学校司書になりました山田直木です。力持ちが自慢です。重たい物も運べます。本もまん画も大好きです。みなさん、図書室で会いましょう。よろしくお願いします」
その後には、給食配膳員になった二人の女の人が話した。

全員の話が終わり、ステージから順番に階段を下りていく時に、それが起こった。直木先生に続く二人の配膳員のうち、後ろの人が足を踏み外してしまったのである。すぐ下にいたもう一人の配膳員に上からどんとぶつかり、そのまま二人一緒にすべり落ちて、ちよつど床に下りた直木先生に、後ろからぶつかってきた。直木先生は、二人を背中受け止め、おんぶするような形になった。

目の前で、キヤツと言う悲鳴の後に、突然人がすべり落ちたことに皆息を飲み、一瞬体育館は静まり返る。

しかしその後直木先生は、二人をおぶったまま全校に向かつて、なんと

「力持ちってわかったね」と言い、へへへと笑ったのである。お笑い芸人のようだった。

なんだこれ！ ナオキは、思わず「プツ」と大きくふき出してしまふ。

すると次の瞬間、それが導火線になったように、体育館中大爆笑となる。皆笑いをこらえきれない。その中で、背中の二人はきまり悪そうに下を向いている。しまった、笑者にしてしまったか。

ナオキが後悔したその時、大崎静子校長はさっと全校の前に立ち、大きく拍手を始めた。

「図書山田先生、すばらしい」とよく通る声で言い、そのまま笑顔で拍手を続ける。

すると、たちまち拍手は全校に広まった。ナオキも思い切り拍手した。笑い声は徐々になくなり、背中から下りた二人は、直木先生に。お礼を言った。それが終わって

「これから始業式です」と声がかかり、静かな中で始業式は始まった。

声を荒げず、魔法のように、拍手一つで子どもたちをさつと動かした。さすが大崎校長だ。小柄な人だが、全校の前に立つと大きく見える。

それに、もし自分だったら、一緒に倒れ、ケガでもしたら大騒ぎになっただろう。あの直木先生だから支えられたんだ。

「ナオキ先生」と、去年初めて子どもに呼ばれた時、ナオキは心地良いくすぐったさと、夢が一つかなえられたよう

な感動を覚えた。でもその後、学校で働いている大人は誰でも、給食の配膳員も、登下校を見守る安全サポーターもすべて、子どもたちに「先生」と呼びかけられるのを見て、初めの感動が薄められた気がした。

山田直木先生は一ヶ月もたたないうちに、その名で呼ばれず「図書山先生」と呼ばれるようになった。最初は「図書の山田先生」と呼ばれたが、子どもたちから「図書山先生」という呼び方が広がり、あつという間に皆がそう呼ぶようになってしまった。お相撲さんみたいだと皆思っていて、本人もそう呼ばれて、特に気にする様子もなく、返事している。ナオキは今年も「ナオキ先生」と呼ばれている。ほっとした。

図書山先生は、いつも白いカッターシャツとグレーのズボン姿で、その上に、ポケットがたくさんある黒のエプロンを着けていた。

「ここらへんでは、5Lサイズの服はなかなか売っていない」と職員室でなげいていた。

「体が入って、動けて、破れない服なら何でもいいんです」とも。大きすぎると、そういう大変さもあるのか。

新学期始まってからすぐ、子どもたちは図書山先生の話をして、いろいろ教えてくれた。

「体育館にイスを並べた時、図書山先生は、いつべんに八個運んだ」

折りたたんだパイプイスを片腕に四脚きやくずつ通して運んだらしい。ナオキは両手で四脚しか運んだことはない。

「小さい子が側溝そくこうに何か落として泣いていたら、図書山先生が手でコンクリートのふたを外して取り出した」

あれは、ボールじゃないと外せないものだ。

「鉄棒にぶら下がったら、鉄棒が曲がった」

これはさすがにありえないだろう。

どの子もわくわくした感じでしゃべる。ナオキも本人と話したくなったが、学校司書は四時過ぎには帰るようなので、なかなかそんな機会はなかった。

あつという間に五月の連休が過ぎた。

ナオキが、金曜日の放課後職員室もとに戻ると、大杉教頭が手招きする。何事かと行くと、明日の資源回収に参加する先生の数が、急に減へってしまったらしい。

「今回だけ特別に、図書の山田先生に頼たのみに行こうと思う。ナオキ先生も資源回収の担当者なので一緒しよに」ということで図書室に行った。

「図書の山田先生なら三人分ぐらいの働きができる。明日半日出勤した分は、代体として一日分認めるから」と教頭

が言う

「いいですよ。明日の午前中ですね」気持ちいいぐらい速いOKだった。

資源回収は、けっこう大変な行事だ。運動場に、新聞紙や雑誌などを積む大きなトラックやパッカー車が、ずらりと並ぶ。校区内の各家庭から、PTA役員が車で集めて、ここに運び込み、それぞれのトラックに分けて積み込むのである。

ナオキたちは一番力がある「雑誌類」を担当し、しばつてある本や雑誌を、下から荷台に投げ込んだ。重い。隣を見ると、今日は上下黄色のスウェット姿の図書山先生は、片手に一個ずつ、二個同時に軽々と放り投げていた。こんなことできる者は、他にはいない。確かに三人分ぐらいの働きである。

七時半に学校へ来て、片付けも終わったのは十時半前だった。いつもより早い。教頭が図書山先生に

「今日は本当に先生に助けられた。さすがだね」と礼を言う

「いいえ、特に苦になりませんでした。でも、こんな大変な仕事、なぜまだ学校に残っているんですかね」と言っ

て行った。ナオキが思っ

この人すごいかも……

それ以来、ナオキは、図書山先生と話すようになった。子どもが下校したらすぐ給湯室に行き、おしゃべりする。図書山先生は帰るが、ナオキはやる事が山ほど残っていた。「五年生の宿泊研修がひと月後にあるので、その準備が大変。昨日帰ったのは十一時過ぎだった」とこぼすと、深く同情した顔で「もう夜勤やきんに近いね。体、気を付けて」と言ってせんべいをくれた。

今年受け持った五年二組の中で、申し送りを受けた子どもの一人が太田ヒロトだ。「ブラジルから来て、父親は今はいない。日本語があまり通じない母親が一人で育てている。まだ入学前の妹がいる。本人は、日本語が普通に分かる。ただかなりの肥満で、六十キロは超こえている。おとなしくて、いじめの対象になりやすい」とのことである。色白で、目はパッチリ、体はポッチャリ、もじもじした感じは受けた。彼は図書委員になった。図書山先生は、彼をベタぼめする。「ヒロトはいいね。まずあの姿に親近感を持つね。図書当番の日は、誰よりも早く図書室に来て貸し出しの作業をするし、『バイトにやとうならこういう子』と思う程、いい働き

ぶりだ」

その日も、図書山先生はヒロトの話をした。

「今日ヒロトが『来週の図書当番できないのでどうしたらいいですか』って聞くんた。どうしてって言ったら、うれしそうに『藍田少年自然の家に行きます』ってね。それから、宿泊研修についていっぱい話してくれたよ、珍めずしくね。わくわくしているヒロトを見るのはいいもんだ。あと一週間なんだね。ナオキ先生、がんばれ」と言って帰って行った。

そんなヒロトが足をねんざした。

月曜日の夕方、家で、高い所にある物を取ろうとして落ちたのである。火曜日に連絡を受けたナオキは驚き、放課後、通訳のオリビアさんに付いて行ってもらって家庭訪問する。

ヒロトは骨折ではなく、松葉杖つえで学校には行けるが、山道を歩く宿泊研修は難むずかしい様子。

「本人はすごく行きたがっているが、これではみんなに迷惑めいわくをかけるから行けない」と、オリビアさんは母親の話を通訳した。ヒロトは泣いていた。何とかならないか……

ナオキはもやもやした思いを、図書山先生に吐き出した。「こういう場合、大体親に付きそつてもらえば参加できるんだけど、ヒロト君の家は小さな妹もいて、付きそいは難しそ

う。それに僕ぼくより重いヒロト君を、あの細い母親がおんぶで
きるとは思えない。このままじゃ多分ヒロト君は久席するか、
学校に来て図書室か保健室で二日間過すごすか、になると思
う」

「運の悪いヒロトやな。すつごく楽しみにしてたんやけどなあ
……」図書山先生は、ちよつと考え込んだ。

「ナオキ先生、俺おれ七十キロぐらい楽勝だよ。ヒロトおんぶし
て山道歩くのもいいな。ヒロトはカレー作りとキャンプファイ
ヤーがやりたいって言ってた」と言う。ナオキは、パツと前が
開けた気がした。そうだ、泊とまらなくても一日目だけの参
加でいいんだ。図書山先生の補助があれば、それができる。

すぐ学年の先生に話し、校長に伝えた。

大崎校長は、教育委員会をうまく説得した。

少年自然の家は藍田市の外れ、山の中にあつた。朝、子
どもたちはバスで出発した。今日は六月十日、雨ではないが
曇くもつている。

自然の家は古く、森の中にあつた。玄関にはカモシカのは
く製せがあり、ヒロトはその近くのいすに座つて待つていた。

図書山先生が、上下黄色のスウェットを着て入つて来ると、
パツと、ナオキが妬やける程の満面の笑みを浮かべる。図書山
先生も、満面の笑みで近づいた。今日のヒロトはまかせた。

入所式後、野外炊事場すいじへ移動する。山の上に建っている
自然の家から下るので、ヒロトは図書山先生におんぶされた。
先頭を歩くナオキは、後ろを確かめながらゆつくりと下り
る。

十分ぐらい歩いただろうか、木立のない平らな場所に出る
と、そこが炊事場だつた。まず火起こし体験をした後、カレー
を作る。

ヒロトが座つて包丁で玉ねぎやニンジン切る手つきは、慣
れていた。ヒロトを見直した。

「家でよくご飯作ります」と言う。

その間に、冷たい風が吹いてきて、空がだんだん暗くなつ
て来た。何とか、ニンジンがまだちよつと固いカレーとちよつ
と芯しんがあるご飯が出来上がる頃、どこかでゴロツと音が鳴り、
ポツンポツンと雨が降り始めた。

「食べた人から片付ける。後三分で食べ終わる」

という指示が出た。茶わんを洗つた事ないのかと思うほど、
子どもたちの動きは、手際が悪い。ゴロゴロという音が、だ
んだんはつきりしてきた。ナオキはどなった。

「自分の仕事が終わつても、みんなの仕事を手伝うこと。
雷かみなりが来るぞ。サボるな！」

そんな中で「愛梨あいりさんが何もせず座っている」とグループ
の子からの苦情があり、ナオキは様子を見に行った。

「高木愛梨は難しい子だから気を付けて」と、担任すると決まった時、主任の後藤先生に言われた。友達関係でのトラブルが多く、去年、最後の方は保健室登校だったらしい。やっぱりやりにくい子である。去年の二年生の子たちはもちろん、今年の五年生の子も、ナオキがほめると喜び、しかるとシユンとなる。愛梨はそれが素直に出ない。自分が思ったことが通らないと、全部やめてしまう。教室から出ていく時もある。そして「学校へ行きたくないと言ってますが、何かあったでしょうか」と母親から電話がかかってくる。

テーブルがある場所で、ヒロトの斜め横ななめに、愛梨はふてくされた顔をして座っていた。

「愛梨さん、グループの子が手伝ってほしいって。まだ仕事いっぱいあるから。座ってないでね。がんばれ」と、ナオキが精いっぱい自分を抑おさえてそう言うのと、愛梨は

「だって疲つかれたもん。いいなあヒロトは、何にもしなくても怒られんから」と、ヒロトをじろつと見ている。ナオキは（抑えろ抑えろ）と自分に言い聞かせながら

「ヒロト君はけがをしている。愛梨さんは大丈夫だろ。他の子みんながんばってるよ」と言っても動こうとしなかった。

ナオキの自制心の限界が来た。

「ばかやろう、何でやらんのか。ヒロトはできないからやらん。お前はやれるのにやらん。全然違う。一緒にするな。甘え

るな」とどなると、愛梨はびくつとした後、周りの子が手を止めて、自分を見ていることに気づき、立ち上がって大声で叫んだ。

「もういやだ。帰る。こんなところ来なきゃよかった。保健の川合先生がどうしても言ってきたから来てやったのに。つまらん、帰る」

そして、自分の荷物を持って歩き出した。「勝手にしろ」ナオキは追いかけていかなかった。それよりも、ただでさえ遅おそくなっていた片付けに追われた。

落雷の危険があるので、一刻も早く自然の家に戻る事になった。愛梨が帰ってしまった事はすぐ主任に伝えたが、「またか」という感じで、ナオキ、生徒指導の田中先生、自然の家の職員で残さがすことになった。

五年生の子どもたちは、後藤先生と三組の根本先生ですぐ連れて帰る。ヒロトは凶書山先生がおぶって歩く。川合先生は一緒に帰りながら、愛梨を捜す。この怪あやしげな天気の下、一人であのうっそうと茂った木立の中を歩き、自然の家まで帰るのは難しいだろうと、皆思っていた。愛梨は多分途中に居るのではないか。

「雷様より先に帰るよ。急げ」とハッパをかけ、後藤先生は速足で先頭を歩いて行く。

見送った後、炊事場付近を捜すが、見つからない。その後分担して、自然の家につながる他の道を捜すことにした。ナオキは、一番遠いキャンプ場までの道を担当する。雨が降ってくる。

愛梨はかさは持っているだろうか。雨宿りあまやどりするなら、ところどころにある小屋か、大きな木の下か……いない。

最初、ナオキは猛烈もうれつに腹が立っていた。こんな場所で、一人で帰ってしまうなんて、何というわがままなやつだ。そう思っていた。

キャンプ場は、人の子一人見当たらなかった。トイレの中を捜し、何棟とくもあるバンガローを捜す。どの棟も鍵かぎがかかっている。全部確かめるが、いない。だんだん不安になってきた。どこに行ったんだ。

携帯けいたいが鳴った。田中先生だ。

「いないか……こちらもない。自然の家の中や付近も捜してもらっているが、まだ見つかってない。さっき五年生は無事着いた」

「ヒロトは？」

「まだだ。途中から別の道を通っている。さすがの図書山くんも、あの山道は厳しいらしい。校長さんには連絡済みだ。あと十分ほどして見つからなかったら、警察に連絡しろとのことだ」そこで携帯は切れた。

愛梨が行方不明になった。この事実がナオキにはつきり突きつけられた。

ゾツとした。もしかしたら、誘拐ゆうかいされたかもしれない。それとも、山道から落ちた？ 池にはまった？ 最悪の場合を考えてしまう。

もし、万が一愛梨が亡くなっていたら、もう教師としてやっていけない……

自分のせいだ。あの時声をかければよかった。

雨は大降りになってきた。ナオキは大声で

「愛梨！ どこにいるんだ。いたら返事してくれ」と叫びながら、池の周りを捜した。池の水面は泡立ちあわ、中に何がいるかわからない。どうか無事でいてくれ。前が見えないくらい降る雨は、ナオキの気持ちと同じだった。「愛梨！」

携帯が鳴った。もう十分たつたのか。絶望的な気分で着信を見ると、図書山先生からだ。雨音でくぐもった声が聞こえた。

「ナオキ先生、愛梨は今ここにいる。無事だ」

ナオキは一瞬しゅん息をのみ、その後「よかったあ」と叫んだ声は、泣き声になった。全身の血液がまた流れ始めた感じがした。

図書山先生は続けた。

「ヒロトと二人で別の道を進んでたら、やぶの中から泣き声が聞こえた。どうもすべり落ちていたようだ。体はどろどろだけど手足は動くし、見た限りでは、大きなけがはしてない。これから一緒に連れて帰る」

ナオキは、まず田中先生に連絡した。それから、たたきつけるような雨も、足元のぬかるみもかまわず、全力で走り出した。

「図書山先生！」と叫びながら。

しばらく行くと、雨でかすんだ向こうに見えたのは、魔人のような姿だった。図書山先生はヒロトを背負い、愛梨を前に抱えて歩いていた。人間離れた姿に驚いたが

「よかったあ」の言葉しか出なかった。すぐ愛梨を受け取った。ずしつと重みを感じる。ナオキは、その泥だらけの顔を見て、これが一番会いたかった顔だと思おうと、泣き出してしまった。

「よかった。無事でほんとによかった」

すると愛梨も、ナオキの首にしがみつки、わんわん泣き始める。そして

「ごめんなさい。先生本当にごめんなさい」何度もくり返す声が、泣き声の合間に聞こえた。

しばらくして、ナオキは涙を払い

「さ、帰ろう。みんな待ってる」と言って、背中に愛梨をおんぶした。この方が歩きやすい。

歩き始めると、ヒロトをおんぶした図書山先生が、愛梨の側に来て話し始めた。

「ちゃんと先生には言えたな。それから、声に気づいたのはヒロトだぞ。『下の方から何か泣き声が聞こえる』って、必死に俺に教えてくれた。この雨の中、俺は気づかなかったな。それからこの道も、ヒロトが足をケガしなかったら、通らなかった道だぞ。全部ヒロトのおかげさ。じゃなかったら、いくら呼んでも誰も来なくて、今頃まだ、すべり落ちたやぶの中にいて、下に水がどんどん増えて、暗くなって、へびやお化けが出てきて……うあ大変だ」

愛梨はビクツとした。

「一人で帰るって言って、ここまで一人で来たんやろ。なかなかやるなあ。でもけつこう怖かったやろう？」と聞くと、素直に

「うん、怖かった」と話す。

「だろうな。意地張って、引つ込みがつかんくなることあるもんな、大人でもそうや。でもそういう時、大体後で痛い目みるんや。今日もそうやろ」「うん」

「もう変な意地張るなよ。ヒロトは命の恩人だぞ」

「うん。ヒロトありがとう」

「お、言えたなその言葉。それから、恩人をないがしろにすることを、恩知らずって言うんや。人として恥ずかしいから、

「恩知らずになるなよ」

二人の会話に口をはさんではいけない気がして、そこまで聞いていたナオキは、自分もまだ札を言っていないことに気づいた。

「図書山先生、ヒロト君ありがとうございます」止まって振り向き、頭を下げる。

急に動いたので愛梨は驚いて

「先生、落ちる」としがみついた。

「ごめんな」と言ったら、図書山先生は大笑いした。つられて、愛梨もヒロトもナオキも笑った。雨はもう土砂降りではない。

自然の家に着いた時、入り口で

「お帰り」と迎えてくれたのは、珍しくトレーニングウェア姿の校長先生だった。

「これで五年生みんなそろったね。待つてたよ。さあ、まずは着がえて。先生方もどうぞ。話はそれから」と、着がえを勧めた。

しかし、びしょぬれ四人組の中で、図書山先生だけは、着がえることができなかった。5Lサイズの服は、なかったのである。泊まるつもりでないので、着がえは持つてきてない。取りあえずバスタオルを二枚巻き、服が乾くのを待つことに

なった。ヒロトは、川合先生が持つてきた体操服が着られた。

着替え終わったナオキは、髪をふきながら、校長にこれまでのいきさつを話した。図書山先生が救いの神に思えたとも。

そこへ、田中先生が白い布のようなものを持つてきた。キャンプファイヤーの時に使う、火の神の衣装で、二枚の長い白い布をぬい合わせ、頭と手が出るようにしてある。古代の貫頭衣のようだ。これなら誰でも着られるだろう。

「いいですね。今日の火の神は私がやることになっておりませんが、図書の山田先生こそふさわしいと思います。お願いしましょう。田中先生、この衣装を届けてください」校長はそう言った。

その後、ナオキも入れて三人で頼みに行った。

火の神の衣装は、ぴつたりだった。

「まあ、図書の山田先生よくお似合い」とにっこりほえんだ校長はこう続けた。

「高木愛梨のことは聞きました。本当にありがとうございます。先生のお力がなければ、今ごろどうなっていたのやら……これぞ救いの神です。ぜひ今日の火の神をお願いいたします。どうすればいいかは、これから私が教えますね」「お願いします」ナオキたちも、声をそろえて頭を下げた。

時間になった。

今日のように雨の降る時には、キャンプファイヤーは、体育館でろうそくを灯して行う。

念のため病院へ行った愛梨は、その後「キャンプファイヤーには出る」と、戻って来た。

薄暗く静まり返った体育館に、後藤先生が開く扉のきしむ音が響く。そして、あの白い服に白い布をかぶり、火の着いたトーチを持った図書山先生が姿を現した。その瞬間「うああ」という大歓声が体育館に響き渡った。

「ええ、図書山、図書山先生や」という声があちこちで聞こえ、楽しそうな笑い声があがる。

その中を、体育館の真ん中、ナオキがペンライトを持って立っているところを目指して、ゆつくりと足を運んでいく。ナオキは、図書山先生が着くとライトを消した。また体育館は静まり返った。

図書山先生はトーチを高く上げた。そして「ここに、友情の火を、藍田小五年生に、さずける」と大声で叫んだ。あれから練習した言葉である。

その後、割れんばかりの歓声が響く中、二人の子が歩み寄る。火の神はトーチの火を、その手に持ったろうそくに点ける。それから二人の子は、並んだ円の両端にゆつくりと戻り、その火を隣の子のろうそくへ点けていく。

灯は次々に点いていき、見る見るうちに体育館に、ろうそくの灯りの大きな円ができた。

ナオキは、灯に照らされた子どもたちの顔を見た。ヒロトや愛梨の顔も見える。ゆらめく灯を見つめている顔は、どれもいい顔になっている。愛梨の顔も、何かがどしゃ降りの雨水で流されていったように、すっきりした感じだ。

感動していたのはナオキだけじゃなかったようだ。火の神も感動していた。

全員に灯が点いたら、火の神は「では」と言って静かに退場する運びになっていた。しかし円の中で、急に歩を止め大声で

「皆の者」と呼びかけた。

「これから、良い事はいっぱいある。本当だぞ。いやな事や悪い事もたくさんあるが、それよりたくさん良い事があるんだ。絶対だ。火の神がそう言うんだ。信じろ」

ナオキは、火の神を信じようと思った。